
N . F . S ~Numbers Four Seasons ~

水鏡樹

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

N·F·S ~Numbers Four Seasons~

【Zマーク】

N5855A

【作者名】

水鏡樹

【あらすじ】

いくつかの特定の都市にだけ生まれる、特殊な能力を持つものが現れだした近未来。N·F·Sを名乗る盗賊団が現れていた。盗賊団は盗みを楽しんでいるかのように、予告状を送りつける。そして盗んだ品物も数日中には送り返して来るというありさまだった。いくら盗んだ物を返すとはいっても警察も黙つてはいられない。こうしてN·F·Sと警察の戦いが始まるのだった。

そこはふわふわのカーペットやソファーがあり、天井からシャンパンテリアがぶら下がっている——誰の目にも金持ちと分かる居間の造りになっていた。

そしてその部屋の中央におかれた金庫の中に、ダイヤの首飾りが入られていた……そう、いまはもう入っていないのだ。

「くそつ、N・F・Sめ！」

茶色いコートに髭面の男が、床に落ちていた『N・F・S參上!』と書かれた名刺を乱雑に踏みつける。

「権田原警部！ それは証拠品ですが……」

慌てて側にいた灰色のスーツにメガネの男が止めるも、

「かまわん！ どうせ何の証拠も出やせんのだ！」

言いながら名刺を拾い上げ、権田原はビリビリに破いてしまった。N・F・Sから予告状の届いたこの家には、権田原を筆頭に部屋を完全に包囲していた。もちろん施錠も怠っていない。だが、暗闇に乘じて現れた盗賊団の姿は影も形もなくなっている。閉めたはずの鍵はあっさりと開いており、包囲網は一点に向けられた集中攻撃により突破されてしまった。

「まあまあ権田原警部、そうカッカしなさんな。どうせ盗んだ代物は数日中には帰ってくるじゃろうし」

灰色のガウンを着込んだ壯年の紳士が、ポンと権田原の肩を叩く。

「あなたがたがそんなどから、あのガキどもは調子に乗るんです！」

権田原が荒々しい口調で紳士を突き飛ばす。

紳士はよろめきながら床へと尻餅をつきそうになつたところを、メガネの男に支えられていた。

「まったく、この街の住人ときたら、N・F・Sが来るのをたのむどるんだから始末が悪い」

ぶつぶつと呟く権田原に、一人の巡査らしき男が駆け寄つていく。

「権田原警部」

「なんだ、新しい情報でも入つたか？」

「富部署長からの連絡です。話があるのですぐ署に帰るよ」と

「わかった」

権田原の返事を聞くと、巡査は敬礼をして持ち場へと戻った。

「なんのようだつてんだまつたく。おい、田淵、いったん戻るぞ」

「了解です」

権田原と田淵はパトカーへと乗り込むと、署へ向かって車を発進させた。

パトカーの運転は田淵が担当し、助手席には権田原が座っている。法定速度をきちんと守つて走る田淵に、権田原が少しいらついたように入差し指で足をとんとんと叩いた。かといって乗つている車が車なのでもつとスピードを出せとも言えない。

左肘を器用にドアへとつき、頬杖をつく。

ゆっくりと流れしていく町並みをぼんやり眺めていると、横から田淵がポツリと呟いていた。

「それにしても……」

権田原の視線が田淵へと移る。それを確認してから田淵は話を続けた。

「なぜ彼らは盗みを働くのでしょうか。盗んだものを返すといひながら考へても、品物自体が目的とは考へにくい」

「あのガキどもは警察をおちょくつてんだよー。それ以外になにが考えられる!」

声を荒げる権田原に怯えつつ、恐る恐る田淵が意見を述べる。

「それなら直接予告状を警察へと届けるはずです。ですが持ち主にだけ予告状を送る。なにか意味がありそうな気がして……」

ドスンと打ちつけられた権田原の右手よって、田淵の声がピタリと止まる。

「あのガキどもがなにを考えて盗みを働くかなど知ったことか!」「ですが……」

「いいか? 肝心なのは奴らを捕まえること、そしてさつさと特防少年院へとぶち込むことだ! そうすれば奴らの考へることも分かるし、住人たちも目を見ますに決まつている!」

権田原は不機嫌に怒鳴り散らすと、押し黙ってしまった。

権田原にそこまで言われては田淵も言い返せなかつた。

警察はN・F・Sを捕まえなければならぬ。そしてその役目をか

せられたのが権田原と田淵なのだ。

心身ともに引き締めた田淵は、ハンドルを強く握りしめる。だが、署内に戻った二人を待ちかまえていた署長は、そんな田淵の決意を無に返すものだつた。

いろいろな大会で手に入れたであるうトロフィーや、歴代の署長の写真が飾られている署長室。窓際に位置する椅子に座つて、富部署長は渋い表情を浮かべていた。

「おれたちをZ・F・S担当から外す！？」

部屋の中に権田原の怒声がこだまする。

富部署長は一度咳払いをしてから、変わらぬ落ち着いた口調で述べた。

「正確には現場から退いてもらつたことがあります。聞き込みなどの捜査は続行してもらう」

「ようするに使いつぱしつつことでしょうが」

権田原の言い分に、富部署長は肯定も否定もしなかつた。

「相手は間違いなく能力者だ」

「そんなことは分かつています！　だいたい、いま分かつたことではないでしょうが！」

「少しようすをみてただけだ。その結果、こちらも能力者でないと分が悪いと判断しただけのことだ」

「どうしたことですか？」

署長が答える前に、二人の背後からノックの音が聞こえた。

「じいざ」

宮部署長が返事をすると、ガチャとこつノブを回す音が漏れる。

「失礼します」

言いながら扉を開けて入ってきたのは、紺色のスーツを身にまとつた端正な顔立ちの女性だった。

まだ二十代前半であるひつ若々しい女性に、権田原と田淵は田を丸くしている。

「紹介しよう。四季雅警部補だ」

笑顔で軽く会釈する雅に、権田原はわざと聞こえるように歎打ちをした。

「ちっ、キャリアか」

ピクッと痙攣した雅が、ゆつくりと面をあげる。先ほどまでの満面の笑顔が、見事にひきつっていた。

「キャリアとかノンキャリアとか、関係ないと思いますが？」

雅も負けじと、過剰にはきはきとしたしゃべり方で対抗する。

その後は一人ともにらみ合つたまま、一言もかわさなかつた。間に挟まれた田淵が年甲斐もなくオロオロとうろたえる。

「署長！ なんでこんなチチくさいガキがN・F・Sの担当になるんですか！」

現状を開拓するために、権田原が宮部署長に詰め寄る。当然雅も黙つていなかった。

「なによ！ わたしがチチくさいなら、アンタは加齢臭のキツいおっちゃんじゃない！」

「なんだと貴様！ 上司に向かって！」

とつておきのカードを出して勝ちほこる権田原を、雅は鼻で笑いとばした。

「なぜ四季君がN・F・S担当かはさうきこつた通り、彼女が能力

者だからだ。そしてこの事件に限り、さみは四季君の命令で動いてもらつ

「や、それはどうすることですか署長ー」

「こま言つた通りよ。権田原くん

肩をポンポンと叩いて、今度は雅が勝ち誇る番だった。だが権田原はとっさに雅の腕を振り払つて、

「貴様なんぞの下で働くか！　おれはおれで勝手にやらせてもらう！　行くぞ田淵！」

そのままさつさと署長室から出でていってしまった。

田淵は権田原の消えたドアと雅を落ち着きなく交互に見やると、雅に一礼してから権田原の後を追つていった。

「まったく、なんなのよあのオヤジは」

「まあ概ね予想通りの反応だった。権田原くんの頑固さは短所でも

あるが、長所もあるからな」

「短所にしか見えないけど……」

ボソッと呟いたため、富部署長には聞こえなかつたらしい。組んだ両手の上にあいを乗せて、富部署長は雅へと尋ねた。

「ところできみの能力だが……」

「それについて一つお願ひがあるのですが」

口をへの字に曲げてから、どうぞといつ意志をうなづく」とで送る。

「助手として、ひとりほしい人材がいるんですけどが」

「ほつ……だれかね？」

「部署は違うんですが、婦人警官をやつてる子で、名前は相楽さゆりつて言つんんですけど……」

雅から名前を聞いて、富部署長は少し考えてから思つ出したように手を打つた。

「そういえばどこの部署にいつても厄介者扱いされるところへ、おつとり系の婦警が相楽とかいつたような……」

「その人に間違いないです……」

ため息混じりに返答すると、当然のように疑問が浮かびあがる。

「そんな子が捜査の役に立つのかね？」

「正確にはわたしの能力を生かすために役立つんですが……」

「ふむと言こつつ、あいをなでる富部署長。だが悩んでこるのはなさそうだった。

「わかった。すぐに手配しておいつ」

「ありがとうございます」

返答を受け、富部署長は弓を出しから資料の束を取り出した。そのまま立ち上ると、それを雅へと手渡す。

表紙には『N・F・Sに関する資料』と書かれていた。

「次の事件が起るまでに読んでおいてくれたまえ」

「はい。それとできればもう一つお願ひしたいことが……」

「なんだね、言つてみたまえ」

富部署長の耳元で、なにやらつぶやく。富部署長は何度も満足そうにうなずくと、

「いいだらう。すぐに手配しておいく」

あつやりと雅の願いを受け入れていた。

「ありがとうございます。では」

一礼の後に敬礼をしてから、雅は署長室から出ていった。

「なかなかのお手前だな。結果を楽しみにしておいつ」

富部署長は元のこすへと座ると、本来の仕事へと戻つていった。

とあるバーの裏にある一室。煌々と蛍光灯に照らされた部屋だ。入り口の真正面に配置されたホワイトボードには、田標と作戦という議題が掲げられている。

だが、他に書かれているのはどう見ても落書きで、議題とは無関係にしか見えなかつた。

部屋の左右にはスチール机が一台ずつあり、それぞれにパソコンが設置されている。

実のところ、ここはN・F・Sの本拠地だつた。だが、室内の雰囲気は盗賊団のアジトという本性を微塵も感じさせない。

そして、部屋の関係者であろう男女は、一台のパソコンへと向かいあつていた。

左側の一台では、まだ幼いつり田の少女が、カタカタと規則的にキーボードを鳴らしていた。

赤い下地の中央に、斜体の白い文字で『GYANBARY』とかかれたシャツ。下は赤と黒のチェックのスカートで、キーボードをまつたく見ることなく打ち続けている。

プリントアウトをクリックすると、横にあつたプリンターがヴィーンと音をたてて動き始めた。

「フウ……」

一息入れた少女は、チラリと背後を盗み見た。もう一台のパソコンの前には、二人の青年の姿がある。

一人は肩に触れる長さの茶髪に青いワイヤーシャツ、一人はなめらかで綺麗な黒い短髪と、黒づくめの上下に身を包んでいる。

二人は時折ゆるんだ目を合わせでは、いやらしく微笑んでいた。

「まつたく……」

少女は嘆くとツカツカと入り口の扉へと歩いていった。腰まで伸びた紺色の髪が、スカートと一緒にゆらゆらと揺れる。

そして入り口横のコンセントをつかむと、思い切り引き抜いていた。ブツン——。

「うああああ！」

二人の悲鳴が室内へと響く。茶髪の男が即座に椅子から立ち上がり、少女を力強く指さした。

「リア！　てめえなにしやがる！　もう少しでダウンロードが終わるところだつたんだぞ！」

「いつたいなにをダウンロードしてたのです？　答えてくれますよね、アスク」

アスクと呼ばれた青年の怒鳴り声にも動じずに、少女　リアが尋ねる。

ウツと一瞬息を詰まらせたアスクは、背後にいる黒髪の青年の肩に手を回した。

「いやあ、ケイがどうしてもつていうからさ」

「き、きたねえぞアスク！　フィンがない間にってお前が！」

ギヤアギヤアとわめくアスクとケイの醜い言い争いに、リアは力なく肩を落とした。

「まったく、男という生物は、どうしていい……」

「小学生のくせして異性に悲觀すんなよな」

「だれのせいでこうなったと思つてるですかー！」

二人が同時に、お互いを指さす。その後は先ほどと同じような、陳腐な言い争いが始まっていた。

呆れはてたりアはパソコンのコンセントを戻し、自分が使っていたパソコンへと戻った。

印刷された資料を確認し、ファイルへと綴じる。ようやく仕事から解放されたりアは、大きく背伸びをすると、

「なあ、なんか変なのが町内に出回つてるぜ？」

言いながら部屋の扉が開き、毛先の跳ねた緑髪の女性が入ってきた。黄色いタンクトップにジーンズという男勝りの格好で、ヒラヒラと

指でつまんだチラシを振つてみせる。

「どれですか？」

チラシをリアへと渡して、ちらりと横を見る。リアはまったく相手にしていなかつたが、まだアスクとケイの不毛な言い争いは続いていた。

「ほら、見ろつていつてるだろ！」

両手を使って同時にげんこつを食らわせる。それでようやく一人の口げんかが止まった。と思つたら、単に矛先が変わっただけだった。

「いてえぞ、フィン！」

カツとなつたアスクが臨戦態勢へと入る。

だが、フィンと呼ばれた女性はあわてることなく、

「へえ……わたしとやろうつての？」

フィンの右手が、スッと前に出る。親指で中指の先を押さえる、いわゆるデコピングの体勢だ。

だが、強気のアスクをたじろがせるにはそれで十分だつたらしい。

「そ、それは反則だぜ、フィン」

「だれが反則だつて決めたんだ？　これはわたしの能力だ。使うか否かはわたしが決める」

じりじりと詰め寄るうとするフィンに、後退していくアスク。その間にケイが割つて入つた。

「二人ともケンカするなよな。それよりも大切なことがあつたんだろ？」

前に出していた右手を下げるから、フィンはリアの持つているチラシをあごで指す。

全員がチラシを読み終えるのを待つてから、

「なあ、どう思う？」

フィンが他の三人へと尋ねた。

「可愛い刑事さんじやないか」

「あなたの第一声はそれだと思つてたよ

目を輝かせながら話すアスクに、半ば呆れながらフインぼやく。

「わたしは罠だと思うです。こんな挑発に乗つたら、間違いなく捕まるですよ」

否定的な意見のリアに頷きながら、フインはちらりとケイのようすを伺う。ケイは真剣な眼差しでチラシを見ていたかと思つと、口元を軽く緩ませた。

「よし、この挑発に乗つてやるつじょんか！」

「本気なの？ ケイ」

「もちろんさ。罠の可能性は高いかもしないが、今まで以上に目立つた存在になれる。そうなれば……」

「おれたちの目的にも一步つながるといふことだな」

こぶしを高々とあげる男性陣。それでも女性陣は納得できないようだつた。

「罠と分かつていていくバカはいないです」

「まったくだ。目立つたところで捕まつてしまつたら意味がない。わたしもバスさせてもらひつだ。期日の明後日までに考えが変わることを祈つてるよ」

そう言葉を残して、二人は部屋から出ていつてしまつた。

「仕方ないな。当日は一人で行くか」

「ああ、いいぜ。かわい子ちゃんにおれの魅力をアピールしないとな」

浮かれ気分のままアスクも部屋から消えていく。一人残されたケイがチラシに目を向けていると、アスクと入れ替わりでバー・テンダーの格好をした男性が部屋に入ってきた。

「おい、春人」

「おじさん……ここではケイって呼んでくれよ。いつも言つてるじやんか」

「知らん。もうすぐ開店だからな。さつさと準備しろよ、居候」「ふあーい」

氣のない返事をしながら、ケイ 春人は、部屋の電気を消して部

屋を後にする。先ほどまで騒がしかつた部屋は、あつとこつ間に沈黙へと姿を変えていった。

警察署の机に座つて、雅はN・F・Sに関する資料に目を通していた。

四人組の盗賊団について分かつてることも増えたが、決定的な証拠は一つもなかつた。

覆面をかぶつた少年少女四人組であること、能力者であること、そして盗んだ物は返却するということ……。

名前についても分かつていて、ケイ、フィン、アスクにリアという四人の名前だが、当然偽名だろう。

そして四人のうち、三人の能力はある程度の予想はついている。だが、四人でいつも行動しているため、だれがどの能力を駆使するのかまでは分からなかつた。

「まつ、とりあえず会わないことにはね」

資料を机へと放り出し、背もたれへと体重をかける。すると……、「おまたせえ、雅ちゅあ～ん」

まつたりとした口調で、手を振りながら駆け寄つてくる影が一つ。「遅いじゃない、さゆり」

「だつてえ、部署の移動とかあ、いつぱいいつぱい手続きがあつたんだよう?」

さゆりと呼ばれた女性は、警察には場違いなフリルのついた白いメイド服のようなものを着込んでいた。大きく強調された胸元が、歩くたびに揺れている

「まあいいわ。さゆりの出番があつたとしても、それはまだ先だしね」

揺れる胸元をにらみつけながら雅が告げると、さゆりは大きく首を傾げた。

「わたしの出番ですか？」

「そう、あなたの能力であるマウスが必要になるかもしれないわ」

にこやかに叫げる雅とは反対に、さゆりは鼻をクスンクスンと鳴らしている。

「ちょっと、どうしたのよ」

「雅ちゃんは、またわたしの唇を犠牲にするつもりなんだあー。」

「べ、別にそんなつもりじゃ……」

慌てふためいている雅に、にんまりと微笑みながらさゆりが顔を上げる。

「冗談だよお！ わたしあつての雅ちゃんだもんねー。」

周りの視線を気にもせず、ケラケラとさゆりが笑いとばす。
「ちょっと納得いかないけど……」

憮然顔で頬を膨らましながら、すっと雅が立ち上がった。スチール製のイスがキィとうめき声をあげる。

「間に合ってよかったわ。せつ、行くわよ」

「行くつてえ、どこへ行くの？」

指の先を唇へとつけながら、訪ねてくるさゆり。

目の前で雅がゆらゆらと一枚の紙を揺らしてやると、紙の動きにあわせてさやかの瞳が揺れはじめる。

さゆりならそのまま田を回して倒れそつた気がして、雅は紙の動きを止めた。

「N・F・Sから来たのよ、招待状がね」

「じょうたにじょお？」

「やつ、これをこの近辺にばらまいたら、案の定反応があつたつてわけ」

先ほどとは違う紙をとりだし、さゆりに見せる。

その紙に田を通すさゆり。そこにはこいつ書かれていた。

『前略 N・F・Sさま。新しいN・F・S担当になつた四季雅です。』

初顔合わせとこいつとで、一度どこのかで会いたいですわ。

よろしければ希望の日時と場所を明記した紙を、警察署までお送りください。

もちろん警官隊を配置して待ち伏せなどはしていません。

こちらはわたしと助手の二人で待つてますわ

そして文章の最後には、ウインクしながら投げキッスをする雅のプロマイドが貼られていた。

「これがどうかしましたかあ？」

「わかんないかなあ。その紙の返答が今日届いたのよ

そして先ほどの紙を渡す。確かにその紙にはN・F・Sからの返答が書かれていた。

『拝啓 四季雅さま。

本来僕たちは警察の方とはかわりたくないのですが、あなたの心意気に負けました。

十三日の午後三時、町外れの角谷ビルの三階でお待ちしております』

「とうわけ。角谷ビルの場所はもう調べてあるから、すぐに直行

よー。」

「はあーい！」

右手を大きく挙げて、さゆりが返答する。

だが雅は片眉だけをつり上げ、ぎゅっとわゆつの腕をつかんだ。

「えつ、なあに？」

「なあにじやないでしょー。その格好で行くつもりー？」

「ええー？　だつてテレビドラマとかでも、警部とか私服じゃない

い

「ものじには限度つてものがあるのよー。わざと更衣室に行つて着替えてきなさいー。」

「ふあーい」

さゆりはふらつきながら、更衣室へと消えていく。

「ふふふ、わたしの能力 メモリーも知らないで。N・F・Sも
まだまだ甘いわね

ほくそ笑みながら髪をかきあげると、フワフワの髪がなめらかに揺れた。

約束の三十分まえに、ケイは指定の角谷ビルに来ていた。待ち合わせをしているアスクの姿はまだ見えない。

角谷ビルは数年前に入居者がいなくなり、すでに廃墟と化していた。割れた窓ガラスの破片が散乱しており、崩れ落ちたコンクリートが所々で瓦礫の山になっている。

三階にあるいくつかの部屋のうち、ケイが選択したのは一番整然としている部屋だった。

もちろんそれは他の部屋と比べればであって、人が住めるような状態ではない。

入り口の方角から足音が聞こえ、ケイがそちらを向く。

「遅かつたね、アスク」

だが、返ってきた声はアスクのものではなかつた。
「まったく、考えなしだなケイは」

声に合わせて姿が見える。そこにいたのはフインだつた。外出用なのか、アジトでみた服装の上に色あせたジージャンを着込み、腰に手をやりつつケイをにらみつけている。

「な、なんでフインが？」

「わたしだつて来たくはなかつたさ。だけどアンタたち一人じゃ、もしもの時に脱出しずらいだろ？」

「だつたらリアに来てもらいたかつたよ……」

ぼやくケイにフインはフンと鼻を鳴らし、部屋の中へと入つてきた。

「リアはいま、アスクを閉じこめてるよ」

「なんでアスクを閉じこめる必要があるんだ？」

ケイの当然とも言える疑問にも、フインは平然と答えてみせた。

「アスクは女に弱いからな。ペラペラとZ・F・Sについて喋られたりしたら困る」

「そこまで節操がないとは思えないけど……」

考え込んでしまったケイへと、フインがなにかを渡す。それは田元を隠す赤い覆面だった。

「ほり、つけとけ」

「そうか、アスクが来ないとなると、これがないってことだよな」「そういうことだ。分かつたらさつわとつわとけ。そろそろ来てもおかしくない時間帯だ」

同じ覆面を、手早くフインも装着する。ケイのものと違うといひは、色が青い点だけだ。

それから一人は無言で手紙の主を待つた。約束の五分前になると、階下から騒がしい声が聞こえてくる。

「雅ちゃん、ここ歩きにくいよお」

「つるさいなあ。のろのろしてると置いていくよー。」

「ああん、待つてよ、雅ちゅあ～ん！」

ケイとフインが顔を見合わせる。とても警察官とは思えない会話だが、部屋の入り口から顔を出したのは、紛れもなく写真で投げキツスをしていた雅本人だった。部屋に入つて二人を一瞥すると、まだ姿の見えない助手に罵声を飛ばす。

「もう……さゆりが早くしないから、先に來てるじゃない」

「だつて足場が悪くて、うまく歩けないんだもん！」

「それでよく警察の採用試験通つたわね……」

呆れつつ頭を押さえる雅の横に、足をもつれさせながら、もう一人の姿が現れる。

雅と同じような紺色のスーツを着ているものの、サイズが合っていないためか、胸元のボタンとボタンの間に隙間が開いていた。

「だつてえ、雅ちゃんのスーツだと、胸が苦しいんだもん。しちうがないじゃない」

雅のゲンコツがさゆりの頭を狙いますと、ピギヤーといつ悲鳴が、静かなビルの中に響きわたつた。

「なんなんだろ、あれ」

「さあな……」

呆気にとられて呆然としているケイの横で、フインがあきれた気持ちを落ち着けるためか息吹きを吐いた。

「どう見ても前任の警部より優秀だとは思えない。

「ほらっ、ちゃんと挨拶するわよ、立つて！」

ゲンコツを恐れてうずくまるさゆりを無理矢理立たせると、雅はケイたちに敬礼した。

「N・F・Sの方ですね。わたしは四季雅。こっちの分けのわかんない子は相楽さゆり。これからN・F・Sの担当になりますので、どうかよろしく！」

✓サインでにっこりと微笑んだ雅を、フインが目線を外しながらつぶやいた。

「漫才コンビの間違いじゃないの？」

ピクピクッと、雅の頬が笑顔のままで痙攣する。

「少々お待ちくださいね！」

そのままいつたん姿を消すと、しばらくしてドグオオンといった激しい衝撃音が聞こえてきた。

「雅ちゃん、だいじょ「づぶう？」

心配そうに訪ねるさゆりをよそに、雅は元の笑顔で戻ってきていた。

「すみません、ちょっと崩れ落ちそうな瓦礫があつたもんで」

「はあ……」

曖昧ながらも納得の返答をするケイに満足したのか、雅は微笑みを崩さずに話を続ける。

「ところで、N・F・Sって4人組じゃあ……」

「罷かもしれないのに全員で来るとと思うのか、ペチャパイ」

またもフインの言葉に反応した雅は、

「ちょっと待ってくださいね～」

部屋の外へと飛び出していた。連続して聞こえる瓦礫の衝撃音に混じつて、

「わる……たなべ……パイ……に……養が……いつてんだ……」

途切れ途切れの罵声が聞こえてくる。さゆりはオロオロしながら、

」との成り行きを見守っていた。

「なあ、フイン」

「なんだ？」

「話が進まないから、あの人に暴言吐くのやめてくれ
両手を上向かせて、あきれたようすのフインだつたが、ケイの申し
出には納得したようだつた。

「お待たせしました」

やはりにこやかに雅は戻ってきた。だが服は細かいホコリにまみれ
ている。

「それで、四季さん」

「雅でいいわよ。えつと……」

「ケイです。こっちの小生意氣な方がフイン……」

「だれが小生意氣なんだよ……まつたく」

フインに反論されると思つていたケイは、少し拍子抜けしていた。
もしかするとまた話が長く、そしてややこしくなると考えたのかも
しれない。

「それでは話を戻します。ぼくたちを呼んだ理由はなんですか？」

雅は少し考えてから、おもむろに口を開いた。

「何か聞いて欲しい」と、ある?」

雅の口から出たのは、そんな言葉だった。皿を丸くしているケイの横で、フィンが声を荒々しくさせる。

「ふざけるなよ。貴様がわたしたちに用があるんだろうが…」「いや、もうわたしの用事は終わったから」

「なんだと!?

「だからさ、ほら、よく犯行声明とかあるじゃない? 盗んだものを返しておぐらいだから、そういうつた信念みたいなものがあるのかなと思つてさ」

フィンをわざとらしく無視して、雅は話を進めていく。

「信念なんてないよ。ただせっかく特別な力があるんだから利用しない手はない。ちょっととしたスリルが味わいたいだけさ」

「へえ……そなんだ」

ケイが答えるものの、雅はなぜか半笑いだった。すかさずフィンが食つてかかる。

「言いたいことがあるなら、はつきり言つたらどうだ? 無能警官」
だが、雅は席を外すことなく、フィンに言い返していた。

「じゃあ聞くけど、スリルを味わいたかつたら、警察に予告状を送つた方が効果的じゃないの? でもあんたたちは目的の家にしか予告状を送らない。これっておかしいわよね?」

フィンのふざけ半分の表情が、フツと消える。

「フィン、雅さんは無能じやないな」

「……ちつ!」

フィンは舌打ちをして、そっぽを向いてしまった。

「どうやら國星つてやつみたいね?」

「雅さん結構鋭いね。といつても、本当の目的を伝える気はないけどね。『つさんとは一味違うみたいだ』

「「ゴリさん？」

「権田原警部だよ。権田原利助だから「ゴリさん。見た目もちょっと
ゴリラ入ってるし」

うつむき加減で、プルプルと肩をふるわせる雅。
同僚を罵倒され、怒っているのかとケイは身構えだが、雅の口から
漏れたものは反論ではなかつた。

「ふはははは！ 「ゴリさんか！ いいよ！ ケイちゃんいいね！
そのネーミングセンスにお姉さん脱帽だよ！」

腹を抱えて笑い転げる雅につられて、ケイも少しづつ、確かに笑い
出していた。

空気の読めないさゆりは落ち着きがなくなり、フィンはあきれたの
か大きく嘆息する。

敵同士とは思えないほど楽しげに笑い続けたケイと雅は、笑いが止
まつてもしばらく動けなかつたほどだ。

「ケイ、いつまではしゃいでる」

ガツンとゲンコツを食らつて、ようやくケイが真剣な面もちに戻つ
た 口元がまだ少しほころんでいたが 。

雅も笑いを止めたかと思うと、今度は不適に微笑みだした。

「さて、そろそろ話は終わりかしらね？ だったら、こちらも仕事
に移らせてもらうわ」

懐へと手を入れて、内ポケットをまさぐる。取り出したのは光輝く
真新しい手錠だった。

「逮捕はしないって約束だつたうが！ やっぱりだましたのか！」「
もともとつり田だつたフィンの田が、さりにつり上がつて雅を威嚇
する。

だが、雅は平然と否定してみせていた。

「そんな約束してないわよ？ 約束したのは警官隊を配置して待ち
伏せしないってことだけ」

「そういえばそうだつたなあ」

「感心してる場合か！」

妙に納得して頷いているケイに、すかさずフインが後頭部をはたく。

「さあ大人しくお縄につきなさい！」

氣合いを入れる雅の横で、さゆりが大きく飛び跳ねる。

「がんばれえー、雅ちゅあーん！」

ガクツと体制を崩す雅に、思わずケイとフインも同情してしまつていた。

「大変だな、雅ちゅあん」

「う、うるさい！　さゆり、出口を塞ぐのよ！」

「ええー、怖いよ雅ちゅん……」

「扉を閉めて、外から押さえとくだけでいいから！」

雅の真剣な指示が伝わったのか、頷いてから外へと出ていく。

「年貢の納め時ね。抵抗しなければ悪いようにはしないわ……って、こらあ！」

人差し指を突きつけたポーズで勝ちゼリフを放っていたにもかかわらず、二人はなにやら言い合いをしていくようで、まつたく聞いていない。

「やつぱりわたしがいてよかつたでしょ？」

「おれ一人なら別にどうつてことなかつたけどな」

などの会話が、雅の耳に届いてくる。

「ちょっと、わたしを無視してなに話してるのよ！」

二人は顔を見合せると、クスクスと笑いだしていた。

「なにつてもちろん」

「脱出の方法だよな？」

「なんですつて！」

雅が叫ぶとほぼ同時に、フインが中指を床へと叩きつけた。

刹那、ビシビシシッという大きな音と共に、コンクリート製の床へと亀裂に入る。

「こー、これは……」

思わず一步下がった雅の前で、次の瞬間には床が大破していた。

「うああああ！」

ガンゴラ「ガツ シヤン！」

けたたましい音ともに、ケイの悲鳴が響く。

立ち上った砂煙が落ち着いてから、雅は目を開いた。部屋の奥先ほどまでケイ達がいたところに、直径五メートルほどの穴が、ぱつくりと大きな口を開けていた。

穴を覗きこんでみると、ケイとフインの姿が一階にあった。どうやら一階を突き抜けて一階まで落ちていったらしい。

「いて……フイン！ ちょっとは力加減つてものを考えろ！」

「仕方ないだろ！ だいたい一階が壊れたのはわたしのフインガーのせいじゃなくて、落ちた瓦礫の衝撃でだ！」

「一階の床に直撃する威力で、フインガーを使つたからだろ？ がー！」

もめ合う二人に、思わず雅の口がにやけていく。

視線を感じたのか、二人が口論をやめて上を見上げた。瓦礫によって舞い上がった砂煙によつて、顔や服がほこりで真っ黒になつてゐる。

「フフッ、じゃあな、無能警官」

「雅さんとは敵ではなく味方として出会いたかつたかな！」

ケイは手を振りながら、フインは無愛想ににらみつけてから、角谷ビルから出でていってしまった。

「ちよつ、待ちなさい！」

当然待つわけもなく、二人は視界から消えていく。

慌てて下に降りようにも、一階まで飛び降りる勇氣と実力はさすがない。

「逃がさないわよ、N・F・S！」

部屋の入り口に駆け寄り、ドアノブを回す。だが、扉はびくともしなかつた。

「ちよつと、さゆり！ 開けなさい！」

ドンドンと扉を殴るも、聞く気配は全くなかった。代わりに、

「本当に雅ちゃんですかあ？」

といった、事態を把握していない、のんきな確認が聞こえてくる。

「そうよー。だから早く開けて！」

「だつたら合ひ言葉を言つてえ！」

「はあ！？ 合ひ言葉なんて決めてないでしょー！？」

「簡単だよー！ わたしの問ひに答へればいいんだからあーーー！」

イライラしながらも相づちをつか、やるつの言葉を待つ。

「では、第一問ー！」

「……問ー？」

「ロッパに入るのに、出すことのできるものは何？」

頭を抱えつつ、どうにか怒りを押さえ込む。

「……わゆつ」

「なあーに？」

「それ、合ひ言葉じゃなくてナゾナゾじゃないの？」

あっけらかんと、わゆつは雅の問ひに答えた。

「やうだよー、雅ちゃんなら分かるでしょー？」

ついにブチ切れた雅は、扉を殴打しながら絶叫していた。

「ふやけてんじやないわよー。わつさと開けなさいー！」

「ピギヤーー！ 恐いよーー。やつぱり雅ちゃんじゃないーーー！」

「ちよつ、ちよつと、なにも泣く」とはないでしょーーー。

「ピギヤーー、ピギヤーー！」

結局雅がさゆりを説得してからナゾナゾを解き、部屋から解放されたのは、ケイとフィンが去つてから約一時間後だった……。

「まつたく、アンタつて子は…」

「え～ん、こめんなさい雅ちゃん！」

とある薄暗いバーの中で、雅はさゆりにここんこと説教をしていた。
他にお客の姿はなく、マスターも無言でグラスを拭いているため、
否が応でも雅の声は響きわたる。

「幼なじみのわたしの声を、なんで怪しんだりするかな…」

「だつてだつて、すごい物音がしたから、雅ちゃんやられちゃった
のかと…」

「それならそれで助けに入つてきてよね！」

グラスに入っていたワインを飲み干し、ふう～と息を吐く。

「それにあの『リ野郎の勝ち誇つた顔！』『そつ簡単に捕まるんだつ
たら、とっくにおれが捕まえてる』だつて！ ほんとつ、憎たらし
いつたらありやしない！」

「ふえ～ん、雅ちゃん怖いよ～」

今にも泣きだしそうなさゆりの前で、三本目のワインをグラスに注
ぐ。

だが、グラスの三分の一まで赤い液体が上ると、瓶はうんともす
んともいわなくなってしまった。

「マスター！ 同じやつもう一本！」

「雅ちゃん、もうやめときなよ。そんなに飲むから、いつも男の人
に…」

「あ、あ、つ！？」

「ピギヤー！ 雅ちゃん、やつぱりごわい～！」

泣き叫ぶさゆりの脇を通り、マスターがやってくる。だが、手には
なにも持っていないかった。

「お客様、わたくしもそろそろお止めになつた方がいいかと…」

「あによ、あんたもわたしに逆らう気…？」

「逆らうわけではございません。ただわたくしの経験からの忠告です。このままでは美しい顔が台無しですよ?」

「あ、あら、そお? もづ、マスターつたら、お上手なんだから…」

一瞬にして機嫌を直し、マスターの腕をバンと叩く。

マスターの腕はヒリヒリと痛みだしていたが、客商売を理解しているのだろう。満面の笑顔を絶やさなかった。

「はあつ、それにしてもどこかにいい男いないかしら……」

ぼやきつつ、最後のワインを飲み干す。

その時、事件は起こった。

「おじさん! ワイングラスの注文、いま届いたよ!」

裏へと続く通路から、一人の青年が荷物を持って姿を現した。雅の耳がピクッと動く。

「ああ、カウンターの裏に置いてくれ」

おじさんの指示に従い、カウンターへと荷物を運ぶ。突然立ち上がった雅は、その背後を追いかけていた。

「よいしょっと、これでよし……うああああー…」

荷物を置いて振り向いた青年は、田の前に立っていた雅の存在に尻餅をついていた。

「あいてて……」

お尻をさすりながら立ち上がると、雅がにっこりと微笑んでいる。

「まさか、こんなに早く見つかるとはね……」

「えつ?」

「あなた、名前は?」

目をパチクリしながら、青年は自分を指さした。

「ぼ、ぼくの名前ですか?」

「そつ、なにか言えない理由もある?」

あくまでにこやかに接してくる雅ではあつたが、田はまつたく笑つていない。

「あ、あの……」

「ほらっ、はつきり言いなさいよ！ 男らしくないわよ！」

「一場春人ですけど……」

春人が名乗ると、雅は時計を見てから、素早く取り出した手錠を春人へとめていた。

「一場春人 愛称ケイ。20時55分、逮捕」

「ちょ、ちょっと、なにするんですか！」

慌てふためく春人を無視して、バーの外へと連れ出そうとする雅。その進行方向をマスターが塞いでいた。

「失礼ですが、警察の方ですか？」

「ええ、四季雅警部補です」

手帳を出した雅の横に、いつの間にか泣きやんでいたさゆりがくつついで手帳を出す。

「同じく相楽さゆり巡査です！」

類と類をくつづけてくるさゆりを押し退けてから、雅はマスターへと向き合った。

「この子はわたくしの甥なんですが、なにかやらかしましたか？」

「ええ、この子はいま世間を賑わしているN・F・Sの一員であるケイです。よつてすぐさま署へと連行します」

「おじさん！ なんとかしてよ！」

雅の背後から叫ぶ春人を手で制してから、マスターは落ち着いた調子で雅への質問を続けた。

「証拠はどこに？」

首をかしげながら、少し考え込む。

「まつ、いつか。どうせすぐ分かることだし」

意味ありげな独り言を放つてから、小さく微笑んでみせた。

「能力者はご存じですね」

「ああ、知っている。絵武市や光砂市なんかに現れる、特殊な力を得たとかなんとか……」

「そう、そして何を隠そう、わたしもその能力者の一人なんですよ」

「わたしもわたしもー！」

横から割り込んできたさゆりを、雅が容赦なくはじきとばす。

「うにゃ！」

悲鳴をあげると、さゆりはそのまま床を転がり、突つ伏したまま動かなくなってしまった。

「わたしの能力、それは『メモリー』です。一度聞いた声を記憶する能力、絶対に間違えないし忘れない。たとえ姿形を変えようとも、わたしには同一人物だとわかるのです」

後ろにいた春人の頭をがつちり掴み、雅はなおも続ける。

「わたしは今日の午後三時頃に、N・F・Sのうちの二人に会った。その内の一人がケイだった。この子はケイとまったく同じ声よ。わたしの能力は故意に声を変えてもどうにもならない。間違いなく一場春人はケイよ！」

「た、たまたま同じ声だったのかもしれないだろ！」

頭を押さえつけられたまま、春人の反論が炸裂する。だが、雅はまつたく慌てていなかつた。

「この狭い地域で、同じ声の人間が一人？ あり得ないわね。同じ声の人間がいる確率とあなたがケイである確率、どちらが高いかは明らかだわ」

バーのマスターはやれやれと首を振り、雅の前の道を開けた。

「春人、警察に行つてこい」

「お、おじさん……」

「調べれば分かるはずさ。無実だと信じているからな

「……うん」

途端に大人しくなった春人を連れて、雅はバーを後にした。

「ま、待つてよ、雅ちゅあん！」

起こしてくれると期待していたさゆりが、慌てて雅を追つて飛び出していく。

「ふう～、やれやれだな

「ケイ、大丈夫ですかね？」

背後から現れたリアが、マスターに訪ねる。どうやら扉越しに話を

聞いていたらしい。

「大丈夫だろ。警察だつてバカじゃない。すぐに釈放されるだ。もし捕まつて留置所に入れられたとしても、あいつならすぐに逃げ出せるしな」

言葉とは裏腹に、心配そうな面もちを浮かべるマスターに、リアは無言で頷くことしかできなかつた。

春人を連れて署に凱旋した雅は、胸を張つて中を歩いていった。その後ろをちょこまかとさゆりが右往左往している。

途中で通りすがりの権田原が雅の姿を見つけると、無限のままつかと歩み寄ってきた。

「あ～ら、どうかしましたか？」「ゴリさん」

権田原の存在に気づいた雅は、声色をわざとらしく憎たらしげに、声をかける。

「なんだと？ シミの分際で」

「なんでシミなのよ！」

「おれが権田原利助で『ゴリなら、貴様は四季雅でシミになるだろ』うが！」

「ぐつ……」

言い負けを喫してひるんだ雅は、形勢逆転とばかりに春人を権田原へと見せびらかした。

「へんつ！ わたしは無能な『ゴリ』とは違つて、きちんと結果を出しうてるわ！」

差し出された春人をまじまじと見つめる権田原。

ぶいつと顔を背ける春人に、権田原の口が弧を描いていた。

「で、証拠は？」

「証拠？ わたしの能力、メモリーの力よ

「他には？」

「特になにも」

「捕まえた現場は？」

「特に……いたあ！ なにすんのよ！」

権田原のゲンコツが直角に雅の頭をとらえる。痛みにこり泣ながらも、雅は涙目だった。

「こんのバカシミがつ！」

「なにがバカなんですか！」

まだ痛みから立ち直つてない雅の代わりに、さゆりが反論する。

「バカシミもバカシミ、大バカシミだつ！　いまの法律では能力だけで犯罪の立証はできん！　常識だぞ！　じついう場合はこいつを拘束する前に、近辺の調査だらうが！　N・F・Sが使つてている覆面でもみつかれば、大きな物証になるんだぞ！」

「う、うるさい！　わたしの能力は完璧なんだから！　署長なら分かつてくれるはずよ！」

頭を押さえながらの必死の反論も、権田原には届かなかつたようだ。「そこまで言つなら聞いてみる。その間におれが現場の調査をしておく。この女は連れていくからな」

「ちよ、ちよっと、なにするんですかあ！」

「つむせー。お前の上司はいまから説教を受けに行くんだ。さつさとあのガキを捕まえた場所へ案内しろ」

「ふえええん、雅ちゃん」

抵抗しようとするやつを引きすりながら、権田原は署からでていつた。

「くそつ、みてなさいよあの、口野郎。いまに世にものみせてやるんだからー！」

意気揚々と春人を連れて、雅は署長室へと向かつていく。

だが、署長の口から放たれた言葉は、権田原と変わらぬ結論だった。

「どうしてですか！　この子は間違いなくN・F・Sのメンバー、ケイなんですよ！　こんな納得がいきません！」

署長室に雅の絶叫に近い声がひびく。それでも署長は腕を組んだまま、まったく動じていない。

「大体ですね、署長はわたしの能力に期待してN・F・Sの担当にしたんじゃないんですか！？」

横では春人がすごい剣幕の雅に一步後退していた。

反対に一步前進した雅は、署長の机に両手を叩きつける。

「納得できる説明をお願いします！」

そこでようやく雅の動きが止まった。ただ、形相は普段とは比べられないほど憤ったままだ。

「では言つが、わたしが君を着任早々N・F・S担当にしたのは、早期逮捕を目指したのではない」

両肘を机に乗せ、組んだ手にあごを乗せる。荒れる雅に対し、署長は至極冷静だつた。

「ではわたしのメモリーはなんのために！」

「メモリーを使えば、覆面をかぶったN・F・Sの正体を普段の生活から見破ることができるからだ。容疑者さえ絞れば、尾行も張り込みもたやすい。違うかね？」

「そ、それは……」

「君はどうも酔っ払つてゐるようだ。少し判断を誤つたのではないかね？　それに現行犯でもないのに、逮捕状もなしに逮捕など以ての外だ。緊急逮捕としても、証拠が君のメモリーだけでは、逮捕状はこれん」

「ぐつ……」

雅の両手が机から離れる。悔しいのか、唇が小さくふるえていた。

「結論を言おう。すぐに釈放するんだ。今度は先走らないようにな

目元を潤ませながらも、雅は力いっぱい敬礼をしてみせる。

そのまま春人を連れて、署長室を後にしようとした時、署長が春人を呼び止めていた。

「一場春人くんだったね？」

「はい……」

見るからにフワフワした皮製の椅子から立ち上がり、富部署長が春人の肩を叩いた。

「今回はすまなかつたな、だが……」

一呼吸おいてから、淡々とつぶやく。

「わたしは四季君のメモリーを信頼している。君はN・F・Sのケイとして一番の容疑者だ。それをよく心に留めておくことだ」そういうと富部署長は、椅子へと座りなおした。ギイと椅子のきしむ音が聞こえる。

「ほひ、さつさときなさいよ！」

富部署長に暗雲を感じつつも、春人は雅に従い署長室を後にしていた。

署長室を後にした二人は、ロビーの椅子に座っていた。時間が時間だけに薄暗く、一般の人どころか警察官もほとんど見あたらない。

「あの……」

「なによ…」

声をかけた春人を一刀両断するような、ドスの聞いた雅の声。春人は少し怯えつつも、拳に力を込めつつ思い切って切り出してみた。

「ぼく、釈放ですよね？」

「ああ、そうですよ！ ケイのくせに面白しないからね！」

「ケイじゃないですって……」

「あのね、嘘つきは泥棒の始まりなのよ……って、もう泥棒だったわね、ごめんごめん」

一人で納得した雅は、そのままそっぽを向いてしまった。

「いや、そうじゃなくて……釈放ならもう帰りたいんですけど」

ピクッと、雅の頬が痙攣する。

「！？」

殺氣を感じとつた春人がとつさに両手で頭を覆うと、ちょうどそこには雅のチョップが炸裂していた。

「ちつ、なかなか鋭いじゃない」

「だからそうじゃなくて……」

「分かつてるわよ、釈放でしょ？ でももう少し待つてもらえないかしら？」

「どうして？」

「あなたがクロだつて証拠がみつかれば正々堂々と逮捕ができるわ。悔しいし、借りなんて作りたくないけど、ここはあのゴリに託すしかないわ」

わなわなと体を振るわせつつ、雅はうつむいていた。膝の上にのせ

られた拳に、ギュッと力が込められる。

「あの……雅さん」

「なによ」

「雅さんは絵武市出身ですか？」

春人に突然聞かれた質問は、雅にとつて想定外だつた。一瞬キヨトンとしてから、意識を戻そうとブンブン首を振る。

「なによ、突然」

「いや、能力者だつて言つてたから、どこの出身なのかなつて確かに能力者である以上、出身地は限られている。能力者が生まれるのは絵武市、光砂市、そして蜜貴市の三都市だけだ。そうなれば、春人の質問も不思議ではない。

「そうよ……つていうか、光砂市と蜜貴市は完全閉鎖してて、鎮国ならぬ鎮市状態じやない」

「それはそただけど、もしかしたらと思つてさ」

無邪気な瞳で話す春人に、自然と雅は続けていた。

「わたしは絵武市出身でよかつたと思ってるわ。特別な能力があつたつて、狭い世の中に引きこもりじやつまんないわ」

「じゃあ、なんで警察官に？」

「メモリーが一番役に立つ職業だからつてのと……あなたは知つてるかしら？ 絵武市の能力者がどんどん行方不明になつての」春人は小さく頷いた。まるで決意を新たにしているかのような、真剣なまなざしだった。

「その事件を個人的に調べたかつたつてのもあるかな？ 放つておいたらわたしまで行方不明になりかねないし」

「自分にもかかわる事件なのに、そんな悠長な構えかたでいいの？」
「よくはないけど、とりあえずわたしが警察で活躍するために、能力者を法的に認めてもらうことが先決ね。誰かさんみみたいに捕まえても意味がなかつたらいやだもの」

春人にヘッドロックをかけ、こぶしで頭をグリグリと擦る。
雅の話に聞き入っていた春人は、あつさりとその洗礼を受けてしま

つた。

「いたつ、痛いよ雅さん！」

「まったく、あなたって変な子だわ。極悪人の盗人かと思ったら、

そうでもないし。なにをたくさんでるのかさっぱりだわ」

「それは結局、なにもたくさんでないってことなんですよ！」

「まったく、口が堅いわね？　ああ、もういい！　とにかくあのゴ

リが帰つてくるまで待つときなさい！」

不当なげんこつが、春人の頭上へと落ちる。そのまま一人はゴリ

権田原警部の帰還を待つた。

小一時間ほど経過した頃、ようやく権田原警部とさゆりが帰ってきた。どこかで合流したのか、田淵の姿もある。

「雅ちゅあ～ん！」

さゆりが半泣きで雅へと抱きつく。どうやら権田原警部にこき使われたらしい。

「権田原警部……」

さゆりを椅子に座らせて、雅が近寄っていく。最初は怪訝そうにしていた権田原が、鼻で笑つた。

「フン、おれが言った通りだつたろうが」

「ええ、ごめんなさい」珍しくしょんぼりしている雅に少し驚きつつも、

「まあ、いい経験になつたる。能力者だからつてすべてを能力に頼るなつてことだ」

ポンポンと頭をたたく。雅の瞳にわずかながら涙が浮かんでいた。「なんだ、これしきのことで泣くのか、シミ」

「シミ言つな！ ゴリのくせに！」

「よしよし、その調子だ。じゃあ簡潔に調査の内容を説明してやる」と横で黙つていた田淵が、スッと手帳を渡す。それをパラパラとめぐり、田淵のページを開くと、雅に説明し始めた。

「あのバーの名前はナンバーズだな。なんでも働いている三人の名字に数字が入つているのと、単純にバーの営業だからということをつけられたらしい。間違いないな、小僧」

暗い中、田淵にライトを照らされながらメモをとる雅の後ろで、春人が小さく頷く。

それを確認してから権田原警部は続けた。

「店主は三村義朝。義理の義に朝でよしともだ。基本的な業務は三村一人でこなすよつだ、小僧……」

「合つてるよ。合つてるから、ちやんと名前で呼んでくれない？」

一場春人つて名前ですか」

「権田原警部、可哀想だからちやんと呼んであげましょうよ」「みうみう

いつたん走らせていたペンを止めて、権田原へと進言する雅。

「さすが雅さんは子どもの気持ちを分かつてゐるなあ」

「もちろんよ。だから名前で呼んであげてください。ケイつて名前

でね！」

「うおい！」

思わずツッコミを入れてしまつた春人に、わざとらしくペロッと舌を出してみせる。この雰囲気だけだと、とても刑事と容疑者の関係には見えない。

「いいか、続けて」

「あつ、はい！　すみません！」

「へへん、怒られてやんの！」

背後から聞こえた勝ち誇った声を、肘てつ一発で黙らせる。ウツといつうなり声が聞こえるも、雅はあっさりと無視していた。

「従業員……といつても手伝いだけだが、三村の家で一緒に住んでいる一人がやつていてるそだ。一人はそこにいる一場春人、そしてもう一人は七瀬深冬だ」

「みふゅつて、どんな字ですか？」

「深いに冬で深冬だ。小学五年生らしいが、なかなかしつかりした子だつたぞ」

「小学五年生……」

雅の頭にフインの姿が浮かぶ。実際に会つて声を聞かなければ分からぬが、フインの物腰やスタイルは、小学生には見えない。

「三村の話によると、小さいころに両親が行方不明になつたところを、春人が連れてきたらしい。そうだな？」

「ああ、公園で泣いてた深冬を家へつれて帰つて、一緒に暮らすようになつたんだ。おれの両親も少し前に他界したから、いまは一人でおじさんの世話になつてゐる」

「と、いうことだ。そして肝心のN・F・Sの証拠についてだが……」

グイッと身を乗り出して聞き入る雅。だが、権田原は小さく首を振った。「酒場の裏口に部屋が一つあつたものの、中はなにもないただの部屋だった」

「なにもない?」

「そうだ。不自然なぐらいになにもない部屋だ。店内なども捜索したが、N・F・Sの証拠になるようなものは何一つなかつた。ようするにそこのこと……一場春人は無罪放免つてわけだ。今のところはな」

ポンと春人の頭をたたき、手錠を外す。

「ふう、やつと帰られる」

手首を振つてストレッチをした後、

「それじゃあね、警察のみなさん!」

手を振りながら、元気に警察署を飛び出していった。

悔しそうに歯ぎしりを鳴らしていた雅に、権田原が奥を指さす。

「作戦会議は部屋でするぞ、四季」

「すみません権田原警部。少し待つていただけますか?」

突然の申し出に権田原は首を傾げながらも、すぐに了承していた。

「よし、さゆり! あなたの出番よ!」

振り向いた雅の視界に、さゆりの姿が入つてくる。
だが、さゆりは口を呆けてよだれを垂らしていた。どうやら疲れと退屈だから眠つてしまつたらしい。

「こいつ、本当に採用試験通つたのか?」

「ほらつ、さゆり! 起きてつてば!」

「ふみゅう、雅ちゅあ～ん。わたし眠たいよお

「いいからさつさとついてきなさい!」

権田原のぼやきに否定できないまま、雅は寝ぼけるさゆりを引きずつて、春人の後を追つていった。

警察署を出た春人は、思い切り腕を空へと伸ばした。完全に暗くなつた外には、人の気配もなく静まり返つてゐる。

「ふう、やれやれ。おじさんの言つたとおり、なんとかなつたな」ピンチを凌いだ春人が、天を仰ぐ。空は曇つてゐるもの、春人の心中は晴れ晴れとしていた。

「まつ、いざとなつたら……」

「なにがいざとなつたらなの？」

春人の心臓が、ドクンと一際大きな音をたてる。

「み、雅さん！」

振り向くと、そこにはさゆりを引きずつてゐる雅の姿があつた。

二ンマリと口元を緩め、春人へと歩み寄つてくる。

「ねえねえ、なにがいざとなつたらなのかなあ？ 雅、分かんなあい」

「聞き違ひじゃないですか？ いざとなつたらなんて言つてしませんよ！」

慌てて否定する春人を覗き込みつつも、意外にあつさりと雅は引き下がつていた。

「まつ、そんなことはどうでもいいの。それよりも……」

春人の手を持ち、握手をする。

「このままおめおめと返すわけにはいかないわけよ」

握手をしたまま、ニッコリと微笑む雅に、春人の背中に冷や汗がわき起こる。

「お願ひがあるのよ、春人クン」

今までよりも色氣を着色して、春人に顔を近づけていく。

「な、なんです？」

裏がえつてゐる春人の声に勝利を確信しつつ、さらに雅はつづける。

「わたしの能力『メモリー』には、もうちょっと変わつた使い方が

あるのよね」

胸元を開きつつ、さらに近寄る。だが、春人は逆に冷静さを取り戻したようだ。

「貧乳ですよねえ、雅さん

「わ、悪かつたわね！」

あっさりと着色された色気は吹き飛んでいた。ムツとしている雅に、春人は腹を抱えて笑っている。

「もういいわ！ とにかく、わたしの能力を駆使するために、あなたの許可が必要なのよ」

「おれの許可？ どんな能力なのぞ？」

「それは秘密よ」

「じゃあ許可なんて出せないね。もし自分をケイだと思いこむなんて能力だつたらどうするのぞ？」

「そつくるわよね、当然」

「もちろん」

納得したようにウンウンと頷くと、雅は背後で倒れたままのさゆりを起こしにかかった。

「ほらほら、さゆり。出番だよ！」

「ふにゃあ、もう食べられない……」

陳腐な寝言を言つてのけたさゆりの頭上に、雅の拳が炸裂していた。

「ピギヤー！ 痛いよおつ！」

飛び起きたさゆりの目を、頬をたたいて完全に覚まさせる。

「あのお、帰つてもいいですか？」

申し訳なさそうに尋ねる春人を手で制して、目を覚ましたさゆりに耳打ちをする。

「はあーい。わかりましたあー！」

フワフワと立ち上がったさゆりは、トロトロと春人へと近づいていく。

そして次の瞬間には、春人の唇と口づけを交わしていた。

「…？」

あまりに突然の出来事で、春人の息が一瞬止まる。

当のさゆり本人は唇を離すと、平然と雅にむかって親指をたてていた。

「さて、と……」

雅が改めて、春人と握手をする。そして、

「わたしの能力を駆使するために協力してもいいって、許可をくれるかしら？」

先ほどと同じように尋ねてきていた。

『だから、嫌だって……』

即刻拒否しようとした春人だったが、すぐに自分の違和感に気がついていた。

声が出ない……というよりも、口が開かないのだ。動搖を隠せない春人を前に、雅はほくそ笑みつつ、さゆりに合図を送る。すると、さゆりは右手を大きく挙げて、まるで選手宣誓のようにハキハキと喋りだした。

「はい！ わたくし一場春人は、四季雅の能力『メモリー』に喜んで協力することをここに誓います！」

『…………』

春人が声にならない悲鳴をあげる。

なんと、さゆりの言つたものとまったく同じ言葉が、春人の口からも発されたのだ。

「くつ……なんだ！？」

ようやく普通に喋れるよつになつた春人は、妙な脱力感に突然襲われていた。

ガクツとその場に膝をつき、上を見上げる。

「許可をありがとね、春人くん」

薄ら笑いを浮かべて、雅が春人を見下ろしていた。

「この子の能力は……」

「『マウス』でえす！ キスした相手に一回だけ好きな言葉を喋ら

せますう！ ちなみにネズミじゃなくて口つて意味だからねえ！」

説明しようとした雅の横から、▽サインを繰り出す。

「ねえねえ、雅ちゃん、褒めて褒めてぇ！」

「よしよし、よくやつた」

頭をなでられて嬉しいのか、まるで猫のようになじみを鳴らす。

「どんな能力……おれをどうするつもりなんだよ」

あきらかに動搖している春人に、怒りの色が見える。真剣な眼差しで、雅は春人へと言い返した。

「近いうちに分かるわよ。心配しなくても命に別状があつたり、あなたを無理矢理操つて罪を認めさせるような能力じやないわ」「本当だろうね？」

「わたしがそんなことをすると思ひ？　そして、そんなことで満足するような人間に見える？」

春人が首を振ると、雅に今までの笑顔が戻っていた。

「あなたとは敵ではなく、味方して出会いたかったわね」

ポンポンと春人の肩を叩くと、雅とさゆりは署内へと戻つていった。

署内に戻った雅とさゆりは、権田原たちの待つ部屋へと向かった。

「早かつたな、なにか分かつたのか？」

部屋に入るなり権田原が尋ねてくる。

長い机が一つと椅子が七、八脚程度の小さな部屋だ。部屋の隅に置いてあるコーヒーメーカーでは、田淵が四つのカップを手元に置き、コーヒーを入れている。

「いえ、特に」

首を振りつつも、雅の表情には余裕がうかがえた。

それを見て安心したのか、向かいを指差す。そこには空席のパイプ椅子があつた。それぞれが椅子に座り、コーヒーが配られると、まことに権田原が口を開いた。

「さて、これからN・F・Sへの対抗策だが……つと、指揮はお前さんだつたな」

「雅ちゃんの名字なんて、なにを今更確認してるんですかあ

さゆりのおどほけ回答に頭を抱えながら、雅が返答する。

「構いません、権田原警部。誰が指揮をとろつとN・F・Sを捕まえなければ意味がありませんから」

権田原がニヤリと口元を緩める。

指揮がされることを喜んでいるところよりも、初対面の頃とは違つ、雅の眼差しが気に入つたようだ。

「よし、それでは作戦に入る。とりあえずN・F・Sの予告状はいまのところどこにも届いていない。今のうちにどうすればよいかを考えておくべきだ。無論、一場春人がケイという前提でだ」

「警部……」

雅の言葉が詰まる。ぶつきらばつな言い方ではあるが、きちんと雅の『メモリー』信頼してくれているのだと思つたら、実はそうではなかつた。

「あの空っぽの空き部屋は怪しそうだな」

「は、はあ……」

密かに抱いていた満足感を打ち砕かれつつ、相づちを打つ。

「いいか？ ナンバーズはバーだぞ？ 空っぽの部屋を有効利用すれば、ワインやブランデーなどの在庫を保管しておけるはずだ」

「保存に適していないだけでは？」

「別に酒に限つてのことでもない。グラスやアイスボックスタイプの予備も必要だろ？」

言われて雅は思い出す。春人が夜に届いたグラスを店内に運び込んでいた。つまり、倉庫はないということになる。

だとすると、空き部屋を使っていないのは確かに不自然だ。

「では、一場春人を監視するということですね？」

「一場はもちろん、ナンバーズも監視しなければならんだろう。うまく行けば、他のメンバーの正体もわかるはず」黙つて頷く雅。N・F・Sのメンバーは大人ではない。ナンバーズに集まるような未成年は怪しいということになる。

「よし、張り込みはおれと田淵でやろう

「張り込みならわたしたちが！」

「ダメだ。張り込みは作戦会議が終わったらすぐに始める。お前たちは今日、酒を飲んでるだろ？」

「は、はい……」

しょぼくれる雅に、権田原は構わず続けた。

「今日はゆっくり休んで、明日から四季たちはN・F・Sについて聞き込みをしてくれ。あと、予告状がきたときもお前たちに任せることにか聞きたいことがあればいつでも連絡をくれ」

「わかりました！」

敬礼をしながらの返事に権田原は頷くと、田淵を連れて部屋を出ていった。

「それじゃあさゆり、とりあえすわたしたちは休みま……」

横を見ると、言うまでもなくさゆりは寝息をたてていた。

「まったく、さやつたら。まあ今日はいろいろあって疲れたから仕方ないか」

自分の上着をさゆりにかけると、

「おやすみ、さゆり」

そのまま雅は部屋を出ていった。

ナンバーズへと帰った春人 ケイに、義朝とZ・F・Sの三人が駆け寄る。

「ただいま」

「どうやら釈放されたようだな」

照れ笑いをしながら頭を搔くケイに、何者かがガバッと抱きついてきていた。

「心配したんだぞ、このバカケイが！」

声をあらげるフィンの頭を、軽く撫でる。

「わるかつたなフィン、まさか声で判断されるとは思わなかつたんだ」

「あの時、あの女は……わたしたちの声を聞いたかつたんだな……」
ケイから体を離しつづぼやく。ケイは一度頷いてから自分の意見を述べた。

「あの面会は、声を聞きたいがために開かれたものだつたんだ。質問などする必要なんてない。名乗らせればそれで事足りる」

フィンが黙つて頷くと、後ろにいたリアが一步前へと進んできた。

「話はだいたいフィンから聞きました。全員で行かなくてよかつたようですね」

「まつたくだ。俺の能力の天敵だな」

自嘲気味に笑うアスク。頷きつつもケイは話を続けた。

「裏の部屋はおじさんが？」

義朝が素早く相づちを打つ。

「緊急事態だつたからな。一応移動しておいたんだ」

「おかげで俺の家はぐちゃぐちゃだけどな」

ため息混じりに嘆きつつ、アスクが肩を落とす。どうやら部屋の有様は相当ひどいらしく。

「で、これからどうするんだ？ ほとほりが冷めるまで大人しくし

とくといつ手もあるが……」

フィンの申し出にいち早く首を振ったのは、腕を組んで考え込んでいたリアだった。

「わたしは反対です。そんなことをすれば、春人がケイだと認めているようなものですよ、フィン」

「ああ、リアの言つとおりだ。というわけで、次の予告状は明日送る」

「なんだって！？」

「マジか？」

「本気ですか、ケイ！」

三者三様の叫びがナンバーズ内にこだまする。義朝は黙つて成り行きを見守るだけだ。

「ケイ、それはそれで怪しいですよ！ 容疑を晴らすためだけに、焦つていると思われるです！」

「わかつてるさ。だからといって日数が過ぎれば、準備をされる恐れがある。明日予告状を叩きつけ、明後日の日曜日に決行だ」「ですが！」

あくまで引こうとしないリア。もちろん、他の二人もケイが焦つているとしか思えなかつた。

だが、すでにケイの頭の中にはシナリオが書きあがつていたのだ。

「みんな、耳を貸してくれ。詳細はこうだ」

四人が顔を寄せ合い、ひそひそと語り合つ。話が進むにつれて、三人の顔色がよくなつてきていた。

「どうだリア？ いけそうだろ？」

「いいですね、ケイ。やってみる価値はあります」

「だけど、それには三村のおっさんの力が……」

慌ててケイがアスクの口をふさいだ。むぐむぐと口を動かすアスクをそのままに、義朝へと愛想笑いを浮かべる。

「言つておくがな春人、おれはもう手伝わんぞ」

「そ、そなんあ！」

懇願するケイから顔を逸らして、バーの片づけをはじめた。

「お願いだつて、おじさん！　あと一回でいいから！」

「ほう、一回でいいのか？」

「えつ？」

そう言われ、ケイはわずかに動搖していた。

手伝ってくれるに越したことはないが、言い方に裏が含まれているのは明らかだつた。

「どういうことです？」

代表でリアが尋ねると、店のカーテンを閉めながら答えてきた。

「簡単なことだ。警察も無能じゃなけりや、この店や春人からマーケをはずしたりしない」

「つてことは……やつぱりどうじうことだ？」

首を傾げて考え込むフィンの隣で、アスクがプツと吹き出す。

「つまり、今までに監視されてる可能性があるつてこつた。そんな中、おれたちが平然と店の外に出てみる。めでたくおれたちも容疑者の仲間入りつてわけだ。わかつたかい？ フィンお嬢様」「……ケンカ売つてんのか？」

フィンの中指に力が込められる。慌てて　といつても笑いながら、アスクは店の裏へと逃げていった。すかさずフィンも後を追う。

「もう一度聞くぞ、春人。一回でいいのか？」

二人の喧嘩に呆れつつも、ケイへと改めて問う。

「に、一回手伝つてください……」

ボソボソと述べるケイ。それでもわざわざ尋ねてくるのは、手伝ってくれる気があるからでは……という淡い期待が膨らんでいた。だが……、

「断る」

「おじさん！」

「おれは最初に反対したはずだぞ。それをお前がどうしてもといつから、お前たちの行動を黙認することにしたんだ。その時に言ったはずだぞ？ 黙つてはいるが手伝いはしないとな」

「それは、そうだけだ！　かわいい孫が捕まつてもいいの？」
わざとらしく目を潤ませていると、リアがケイに続いていた。

「義朝さん。わたしのせいでケイがこんなことになつたです。わたしがわがままを言わなかつたら、N・F・Sすら存在してないんです！　だからケイを責めるのは違います！」

リアの渾身の訴えにも、義朝はまったく動じなかつた。

「別に責めているわけじゃない。ただ責任は負わなければならない。盗んだものを返したからといって、盗み自体が無罪になどならない。ショボくれるケイに、やれやれと両手をあげる義朝。

「まつたく、世話の焼ける奴らだ。今回だけだぞ？」

「おじさん！」

「義朝さん！」

ケイとリアが同時に叫ぶ。

「ただし、今回が本当に最後だ。次に力を貸してくれなんぞぬかしたら、その場で警察に連れていくて正体をバラすからな」

「うつ……」

一瞬、返答に苦しみつつも、ケイはこいつと頷いた。背に腹は代えられないと判断したのだ。「

「で、どういう作戦なんだ？」

義朝に聞かれて、先ほど話していた作戦を聞かせる。最後まで聞くと、口元をほころばせながらケイを見下ろしてきた。

「なるほどな。悪くないかもしれん」

「でしょ？　というわけで、とりあえずおじさんはフィンを家に送つて。アスクの実践練習もかねるから、おじさんは髪の毛をアスクに渡して家に帰つていよいよ」

「了解だ。家で電気もつけずにゆつくりとけつてことだな」

苦笑いを浮かべるケイをそのままに、義朝は裏へと入つていった。いまや空き部屋となつてしまつた一室へと入ると、入り口付近でフインが奥にいるアスクを睨みつけている。「ほら、喧嘩するな」

「アスクはいつもわたしのことバカにしてんだ！　今日こそ痛い目

に……」

と、突然フィンと義朝の姿が、何の前触れもなく消えてしまった。だが、普通なら慌てるはずの現象にも、アスクはまったく慌てていない。

それから少しの時間が経つと、またも前触れもなく義朝の姿が現れていた。そばにフィンの姿はない。

アスクが口笛を吹きつつ、感嘆の声を上げる。

「よく協力する気になつたね？ テレポートは極力使いたくないって言つてたくせに」

「最初で最後や」

「部屋を空にした時も同じこと言つてなかつたつけ？」

「あれは俺が勝手にやつたことだ。頼まれてじゃない」

髪をかきあげてから大きく息を吐いた。義朝の表情に疲れが見える。「んじやま、俺も家まで送つてくださいな」

「わかつた……言いたいところだが、ケイがいつてたぞ。実践練習もかねてお前と帰るつてな」

「……マスクを使えつてか。せつかく楽して家まで帰れると思つたのに」

肩を落としつつ、義朝に近寄つていぐ。

「んじや、髪の毛一本もらうね」

「あまり痛くすつ……！？」

義朝の言葉が終わる前に、アスクの指が頭から髪の毛を抜きざる。痛そうに頭を撫でる義朝の目には、うつすらと涙が浮かんでいた。

「おつと、こめんな三村のオッサン」

「まったく誠意が感じられんが……」

愚痴をこぼしながらも、瞬く間に姿を消す。またテレポートでどこかへと移動したのだろつ。

「さてと、それじゃあ帰るとするか……」

大事そうに義朝の髪の毛を握り、空き部屋から出していく。N・F・Sと雅たち警察の戦いが、いま始まろうとしていた。

権田原と田淵が車でナンバーズに到着した頃、タイミングよくナンバーズの明かりが消灯した。

表の扉から出てきた三人は、一場春人に七瀬深冬、そしてマスターでもあり一人の保護者でもある三村義朝だった。

家族としての絆か、三人は義朝を中心に手をつないでいるようだ。これから帰宅するところなのだろう。

「どうします？ 家まで尾行しますか？」

「……」

無言のまま、去っていく三人を見つめる権田原。
と、いきなり権田原は車から降りて三人へと近づいていった。

「ちょっ、権田原警部！」

田淵が止める暇もなく、権田原が声をかける。

「これはこれはお三方、今お帰りですか？」

ビクッと体をすぼめたのは、一人義朝だけだった。春人はめんべくさそうに、深冬は平然としている。

「おれは無罪だつたんでしょ？ まだ付きまとつてるんですか？」
嫌みをたっぷり込めて、吐き捨てるように言い放つ。だが、

「いや、たまたま通りかかつただけだよ、ケイ……じゃなかつた、

春人君」

負けじと権田原が言い返す。

「行こうよおじさん、相手にすることないよ」

「あ、ああ」

ペコリと頭を下げて、三人は去つていった。

「どうしたんですか、権田原警部。らしくないですよ

追ってきた田淵が背後から声をかける。

「田淵、お前はここで待機だ」

「はっ？」

「単なる勘なんだが、様子がおかしい。特に三村義朝がおどおどしている」

「まさか、偽物とでも？」

「わからん。だが可能性はある。俺はあいつらについていくから、お前はここで待機してくれ。ひょっとしたら本物の三村義朝が出てくるかもしれん」

田淵はこういつた権田原の觀察力に、常日頃から敬意を評していた。普通の人なら見逃してしまいそうな小さな違和感も、決して見逃さない。

先ほどナンバーズ内を捜査した時もそうだった。

ただの空き部屋としか感じなかつた田淵に対し、権田原はすぐさまナンバーズが怪しいと認識していた。

確かに少し口が悪いところもあるが、それを上回る刑事としての素質が権田原にはある。田淵が権田原を慕い続けている理由もそれだ。

「わかりました。ではここで待機します」

「ああ、頼んだ」

権田原は三人の後を追つていき、田淵は車内へと戻る。だが、眠気をこじらえながらの必死の見張りも、徒労のまま過ぎていくのだった。

三人の行方を追うと、そう離れていない場所であつさりと見つかった。

電灯がないためはつきりと確信があるわけではないが、シルエットは先ほどまでとまったく変わっていない、手をつないだ状態だ。

「ちよつと」

権田原が慌てて呼び止める。すると立ち止まつた春人が、イライラしながら荒れた声を放つた。

「いいかげんにしてくれない？ でないと監察室に連絡するよ」

「ハハハ、それは困るな」

返された権田原の言葉で、自分の行為の無意味さに気づく。

「本当ですよ。いつたいなんなんですか？ 話ならさつきした以外知らないですよ？」

深冬も権田原に訪ねてくる。義朝は喋らずに、成り行きを見守つているようだ。

「いえね、さつきナンバーズにお邪魔した時と比べて、三村さんの顔色が優れないようなのです……」

もちろんこれは権田原の方便だ。ただでさえ電灯がなく暗い夜なのに、顔色の変化など分かりはしない。

「わたしがですか？」

ぼそぼそとした喋り方で、ぐぐもつた声を出す。

権田原の疑惑は今や確信へと変わろうとしていた。

「ちよつと失礼！」

一瞬の隙について、権田原は義朝のほっぺを引っ張つていた。変装をしているのであれば、これでマイクがとれるはずだ。だが……。

「痛つ！」「

うめき声をあげて素早く権田原の手を振り払う。

顔をしかめつつ権田原を睨みつけてくる義朝の表情は、到底演技とは思えなかつた。「なにかわたしに恨みでも？」

あくまで冷静を装う義朝ではあつたが、はらわたが煮えくり返つているのは間違いない。

「いえ、ちょっとしたイタズラですよ」

「まったく、子どもですかあなたは」

愛想笑いを浮かべながら、権田原は義朝に触れた指を合わせる。感触は間違いなく人間のもので、メイクのかけらも感じ取れない。

「おじさん、早く帰ろうよ」

「そうです。礼儀を知らない人に礼節を重んじる必要はないです」

怒り心頭の一人をなだめて、権田原へと会釈する。そのまま三人は権田原を置いて帰つてしまつた。

「こりや、勘が外れたかな？」

頭を搔きながら三人を見送ると、権田原は来た道を引き返し、田淵のもとへと帰つていく。車に戻ると、眠そうに目をこすつている田淵が出迎えてくれた。

「こりちは特に異常なしでしたが……どうでしたか？」

「ダメだな……年はとりたくないもんだ」

「まだまだ大丈夫ですよ、権田原警部」

田淵の何の気ないフォローに、権田原は救われた氣がしていた。

家の中に入つた春人たち三人は、権田原がついてきてないことを確認してから鍵をかけた。

三人の口から、同時にため息が漏れる。

「ふう、心臓に悪いなあ」

「まったくです。もう少しシャキッとしたらどうですか？」アスク「んなこと言つたつてなあ、ゴリさんの勘がするどくなつてたんだから仕方ないだろ？」

春人と深冬、そしてなぜかアスクと呼ばれている義朝がもめあつていると、部屋の奥から人影が現れた。

「なんだ、なにかあつたのか？」

声の主は義朝だった。そして田の前にいる自分に対し、顔をしかめる。

「早く解除しろよ。いやな気分だ」

「へいへい」

春人と深冬の間にいる義朝が、指に巻かれていた黒い糸 正確には髪の毛だ を外す。すると義朝はあつといつ間にアスクへと姿を変えていた。

「なんだか不安になつてきたなあ」

「まったくです。もし失敗したとしたら、原因はアスクの可能性が高いですね」

「あのなあ……」

「うなづく二人に、不満そうなアスク。

「まつ、どっちにしろ今回の作戦にはアスクの能力が必須だからね」「頼りにしてるですよ、アスク」

からかい半分な口調で、深冬がアスクの肩を叩く。その手をはじき、アスクはそっぽを向いてしまった。

「むくれたですか？ 子どもみたいですね」

「小学生のガキンチョにや、言われたかないぜ」

「やるですか、アスク！？」

「望むところだぜ！」

飛びかかっていくアスクに、深冬は手をかざした。すると手にふれたわけではないにも関わらず、アスクの体はいつこいつに近づかない。

「きたねえぞ、リア！」

「何とでも言うがいいです」

「本当に大丈夫なのか、こいつら……」

「大丈夫だよ。アスクだつてやるときはやるんだし、リアだつて本気で心配なんかしてないよ」

深冬への実力行使が無駄と分かり、醜い言い争いへと形を変えたアスクを前に、義朝は頭が痛くなっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5855a/>

N . F . S ~Numbers Four Seasons~

2010年10月28日03時07分発行